



「イヌは、ヒトとのコミュニケーション上手な動物」

麻布大学 獣医学部伴侶動物学研究室 教授 菊水 健史

「Man's Best Friend」といわれるよう、イヌは3万年ほど前からヒトと共に歩みだした、地球最古の家畜です。日本におけるイヌの飼育頭数は1000万頭を超え、実に世帯数の20%弱がイヌと共に生活していることになります。なぜイヌがヒトとの生活にこれほどまでに深く関わるようになったのでしょうか、それは言葉を用いないイヌとヒトとの間にある特殊なコミュニケーションかもしれません。近年の認知、神経内分泌の研究によって、イヌとヒトとの間における生物学的な絆の根拠が明らかになってきました。

イヌのネオテニーという進化

イヌにはたくさんの行動学的な特徴があります。オオカミらしい風貌のシベリアンハスキーでは、オオカミ様の攻撃性や服従行動が観察されますが、愛玩動物としての歴史の古いキャバリア・キングチャールズ・スパニエルではそのうち2つだけが認められます。

興味深いことに、オオカミの発達と比較すると、オオカミで幼少期すぐに観察される行動は、多くの犬種で確認できますが、オオカミでも成長しないと発現しない行動になるとイヌではそのような行動を認めるのは稀となります。このことは、イヌがオオカミの性成熟過程で成長を止めること、つまりネオテニー（幼形成熟）を意味します。



遊んであげることで互いの愛着が促進。

おいては絆の形成にも役立つことが知られています。遊びを介してオピオイドが分泌され、遊びの相手との親和的な関係性が深まり、さらにはもっと遊びたい、という快情動が発達するのです。つまり、イヌと遊ぶことは、イヌと飼い主の間の愛着を促進することになります。このようなイヌの行動のネオテニー化は、遊びに限らず、大人になっても見知らぬものへの興味や探索心、学習能力や友好的な態度、寛容性など、まさにイヌの特徴とも言えるでしょう。

イヌとヒトを絆ぐ

これまでの認知心理学の領域では、霊長類が特別に高い社会認知能力を持つと考えられてきました。たとえば共同注意という能力は、仲間と同じ物を見て捕らえる、互いの意図を理解するなどに関わるもので、高い社会的知能が必要になります。

イヌにおけるヒトの指差しに従って行動する能力を調べ、チンパンジーと比較したところ、チンパンジーよりも優れており、またオオカミでもできない、イヌに特別な能力であることがわかったのです。ヒトとイヌは目と目で絆がり、お互いの意図が理解できるよう、収束進化したのかもしれません。



空っぽの容器とおやつ入りの容器を並べ、おやつが入っている方を人が指差して教えると、犬はその意味をすぐに理解するが、チンパンジーは、なかなか理解できない。



視線を交わすことで絆が形成される。



「賢い」といわれる犬、その実力は？

犬がどれくらいの知力の持ち主なのかは、飼い主さんすべての関心事。そこで、犬の「知能」について、最近のトピックスをご紹介。

犬の知能って、どのぐらい？

人の2歳児程度の知能の持ち主

犬は、人の言うことをどれぐらい理解しているのでしょうか。カナダの心理学者、スタンレー・コレン氏の研究によれば、ほとんどの犬は人の2歳児程度の知能をもち、165個の言葉を理解し、4～5まで数えられるボーダーコリー、やブードルでは、250の言葉や合図を理解し、簡単な計算もできるのだそうです。もちろん犬種差や個体差はあるでしょうが、その潜能力はかなり高そうですね。

犬種別「知能」ランキング



牧羊犬の代表犬種・ボーダーコリー。運動・訓練性能が高く、ドッグスポーツ界でもスター。



ぬいぐるみのように愛らしいプードル。泳ぎが得意で元はカモ猟の回収犬として活躍。

コレン氏は、犬の知能について、犬種別のランキングを作成しています。それによれば、1位ボーダーコリー、2位ブードル、3位ジャーマン・シェパード、4位ゴールデン・レトリーバー。その他人気犬種では、49位ダックスフンド、67位チワワなど。ちなみに最下位は79位アフガン・ハウンド。

ここでの知能とは、あくまで人の指示を理解し従う「作業・服従型」能力について。そのため牧羊犬や水鳥猟の回収犬たちが上位を占め、対して古い犬種ほど下位の傾向にあるようです。

人の脳が他の動物と最も違うのは、知的活動を支える脳の司令塔「前頭葉」の占める比率が大きいことです。人の場合、脳全体の29%ですが、犬は約7%、猫は約3.5%。前頭葉には、状況変化に臨機応変に対処する働きがありますが、引っ越しや家族の増減など、飼育環境の変化に対し、猫よりも犬の方が慣れやすいのは、脳の仕組みの違いかもしれませんね。



脳の司令塔「前頭葉」の比率は？

犬の特徴を「脳」から見てみましょう。500種に及ぶほ乳類の脳を分析した最近のオックスフォード大学の研究によると、長い年月をかけて、最も脳が発達した種は猿、馬、イルカ、犬の順。これらの大きな脳をもつ種は、複雑な社会的行動を営んできたのが特徴で、犬が犬同士の交流で脳を刺激し合い、大きく発達させてきたのに對し、単独行動の猫の脳は犬のよろには発達してこなかつたようです。

もうとも、脳の平均的な重さは犬が64g、猫は25gですが、体重比では猫の方が重く、また大脳皮質のニードロンの数は犬の1.6億に対し、猫は3億。単純な優劣比較は難しそうです。

脳の仕組みから見てみよう

他の動物と比較すると…